彙報

◉京都帝國大學文學部史學科研究旅行

史學科本年度の春季研究旅行は去る五月廿九日より三日間、三浦、西田、天沼三教授、小牧講師指導の下に高野山に行はれた。一行二十一名、例年以上の盛んな旅行であつた。

廿九日(土)雨。午前七時三十七分京都驛を發し大阪難波驛から南海電車高野線により終點高野下驛からは更に自動車に乘じ不動坂廿八町を徒歩して午後二時女人堂に達し、高野山大學の久保雅友氏の出迎を受けた　降雨の爲豫定を變更して直に宿坊と定めた清淨心院に向ひ、そこから輕裝に改めて奥院に詣でた。一ノ橋を渡つて路の左右に無數に立並んだ大小名等の墓石を縫うて行く。佐竹義重のを始め慶長年間の墓堂の木鼻や墓殿等は天沼教授の指摘なくしては見逃す程の小さなものであるけれども桃山期の特徴をよく表はして居る。長德三年藤原仲光が多田滿仲の爲に立てたといふ五輪塔三基は相並ぶ墓碑中最古のものである。有名な朝鮮陣供養碑の横にその英譯文を刻して立てたのは赤十字精神の日本にも古く存したことを特に外人に對して實證するの用意とか聞いた。文永以來の町石康永三年以下多數の板碑、慶長年間造立の結城秀康及び其生母の石室等に注目しつゝ漸く奥院に達し唐前に燒香した後宿坊に引かへした。

卅日(日)雨後晴。午前八時雨をおかして先づ金剛三昧院に赴き直に書院に通されて所藏の古文書を一覽する。舊上藏院所藏の伊豫河野氏文書系圖、木食應其上人自筆の書狀等に交つて明應年間個人の印章ある書狀のあつたのは珍らしく、福島正則、加藤嘉明等が登山の上は必ず貴院に宿泊すべきことを述べてゐるのはこの時代高野山と諸大名との關係を語るものとして面白い。莊園に關するものには正平十八年所領安堵の綸旨や德治二年以下の役夫公米免除の御教書等の外、延應元年以下の實檢田畠名寄帳等には當時の土地管理が如何に行はれてゐたかを示すべき資料多く、この方面には猶廣い研究領域が取殘されてゐることを感ぜしめるに充分であつた。文書以外には文永の頃、文選讀合の爲右京大夫俊國の儒亭に參つて

聽聞のまゝを記した旨の跋文ある關東武家式目は貞永式目の註釋の中最も古いものゝ一つとして注意を惹いた。尙大塔舊記なるものは誤字宛字等が多くて難解のものではあるが細かに研究すれば今猶疑問とされてゐる根本大塔の建築の樣式細部等に對して新しい光明を投げうべきものであるらしい折しも雨脚の漸くにぶつた頃一行は多寶塔を前にして立つた。貞應二年尼將軍が三代將軍の菩提の爲に建立したもので、石山寺のそれと共に當代に取つて貴重の遺物である。外側の形のよい裝飾臺股は勿論、方柱の面の廣さや板扉などいづれも鎌倉の特徴を語るものであるが內部の長押天井の間に横連子を用ひたところ、天井塔緣や支輪の間等に、飾金具を打つ代りに寶相花や蓮花紋を描いた點など何れもよくその時代に相應する。唯須彌壇勾欄のみは或は後の修理にかゝるものでなからうかこの疑がないでもない。さはれその上に据えられた國寶五智如來こそは目さむるばかりの逸品であつた。頰のふくらみ腕のしなやかさ、肩から腰へかけての線のなだらかさ、彫刻の上に漸く寫實的分子の多く加はるやうになつた鎌倉時代に於ての代表的な一收獲であらうと思はれ、殊に近く寄つて細かに見ると精巧な截金が衣紋の上によく殘つてゐるのも嬉しかつた。三昧院境內には別に鎌倉時代の校倉造の倉が一棟あつて特別保護建造物に指定されてゐる。

金剛峯寺の殿舍を一巡した後一行は直ぐに東塔跡を過ぎつて不動堂に向つた。五間四面單層入母屋檜皮葺、正面及び側面の一部を一間吹放しにした輕快な建物であつて。臺股の裝飾四隅の支輪の納め方に鎌倉時代の建築家の自由の精神が窺はれる。釘隱や須彌壇などの金物にも注意すべきものが多かつた。不動堂の斜面に根本大塔の跡がある。弘仁十年の創建以來、幾度か火災に遭ひながら天保年間までは猶當初の面影を傳へてゐたものを今は僅に廣き土壇の上に空しく數列の礎石をとゞめてゐる丈である。一行は各自その一つ〳〵に佇立したが、占められたものは全礎石の半數にも及ばなかつたのを見て今更乍ら方十六間高十六丈といふ大塔の眞の大きさが解つた樣にも思はれた。金堂と相前後して聳立したその雄姿には確に八葉峯の中央を鎭し密嚴の根本を示すべき偉大と莊嚴とがあつたであらう。孔雀堂に國寶孔雀明王を見、御

社西塔御影堂等を一巡して金堂に賽する。現今の建物は萬延元年に成つたもので總て德川時代の樣式に從つてゐる。その內部の華麗は人口に膾炙するところ、本尊藥師如來は祕佛として金扉の中に安置さるゝも脇士の普賢菩薩、不動明王、金剛薩埵、金剛王菩薩、降三世明王、虛空藏菩薩の六體は弘仁期の代表的作物である。金堂は幾度となく炎上したにもかゝはらずこれらの諸像が常によく災禍を免れたことを喜ぶにつけても、それが決して單なる一個の優秀な美術品たるが爲ではなく全く生ける信仰の對象であつたればこそと頷かれた。午後一行は先づ親王院に赴いて山內石碑等の拓本を見る。言ふ迄もなく高野版の研究その他の著書によつて知られた水原堯榮師が親しく蒐集されたものであるが、師は一行の爲にその一一についての說明の勞を執られた。昨日見た朝鮮陣供養碑もあれば康永の板碑もありその他梵鐘、燈籠、磬などに至るまで山內の目ぼしいもの一として餘すところがない。南北朝時代のものにして南朝の年號を有するもの僅に四、他はすべて北朝の年號を用ひてゐるのは同時代に於いて高野山の嚮背を暗示するものではなからうか。辭して靈寶館に向ふ。こゝの蒐藏はまた實に驚くべきものがある。凡そ平安鎌倉の繪畫彫刻の逸品をかくまで多く一所に收藏するものは恐らく他に類があるまい。その個々に就いての研究さいはず單に瞥見の印象を記すだけでも容易でない。正面金剛吼菩薩の大作を劈頭に丹生狩場兩明神像、善女龍王以下、相並ぶごの繪畫も、早朝以來多種多樣のものを見て聊か疲れを覺えて來た一行の眼を再び緊張させずにはおかなかつた。廊下を折曲るところにある枕本尊は高尺餘の厨子の中に籠彫式に釋迦如來及び諸尊像を刻したものその構圖は法隆寺壁畫のそれと同じく、その表情には平安朝の普通の彫刻には見られない明るさがたゞよつてゐる。文館詞林は言はずもがな宋版高麗版の一切經、色紙法華經秀衡納經等は多くの經卷の中で特に光つてゐた。彫刻では大日如來、阿彌陀如來以下多數の國寶中運慶作と稱する不動堂の八童子が特に印象深かつた。それは單に鎌倉時代ばかりさいはず日本彫刻史上に於て最優れた作品の一であらねばならぬ。これらの美術品を見た後、一行は改めて寶簡集の中から選ばれた主なる卷々に目をさらした。後白河法皇の御手印ある

御起請文、天子尊治の御親署ある後醍醐天皇の勅願文、護良親王の御眞跡等を前にして嚴肅なる感にうたれる。長慶天皇宸翰として有名な御願文の「今度之雌雄」云々の文意については公武の戰爭ではなく南朝内部の衝突を意味するものであらうこの事などについて三浦教授の説明があつた、その他賴朝義經の書狀等卷を開くにつれて貴い史料が續出して印刷されたものでは到底味はれない興趣が次から次へとこめどなく湧き出でるを覺えた。見て行く中に又續寶簡集の中で大日本古文書の中に收められなかつた箱の一つあることが知れた。その内容は應仁、永正、慶長等の年號ある任日等の殘缺すべて十六卷であるが見樣によつては捨てたものでもなからう。閉館の時刻を過ぎてから名殘惜くもそこを出で、三々五々打連れ立つて數町を隔てた大門を見る。傾いた夕陽を眞横に受けて長く影を曳いて立つたその姿には聊か間の延びたやうな物足りなさはあつても、またどこかにすてがたい大きいものがあるやうに見えた。斯くて宿坊に辿り着いたのは七時頃であつたらう。

卅一日(月)晴。今朝は先づ有名な赤不動の拜觀にと一行は七時明王院に至る。玄關に上るや先づ手を淨めさせられ朝日をうけて明るい東向の書院に通さる。丈餘の軸物はやがて恭しく被ひを取除かれて一行の前に現れた。その構圖の偉大かその筆力の遒健か乃至はその火焔の威力か――恐らくはそれらのすべてゞはあらうが――一行は一目見るなり畫面にあふれた或る力に打れて一語を發するものもない。不動明王は岩石に腰をかけ左脚をあげて心もち右方を睨み、右手に倶利迦羅龍劍を握つてゐる。その劍の與へる上昇の感は普通兩脇にあるべき二童子が左手一直線上に並んで突く棒の下向の感とよくつり合ひ紙外に燃え上つた焔の勢は下部に蟠る岩の群青に落着を與へられて畫面に一寸の隙もない。殊に顔の表現などはすばらしいものがある。一行は或は近づき或は遠ざかつていつまでも〳〵ながめ入るのであつた。この赤不動と並んで野山の有する世界的名畫の一たる阿彌陀如來廿五菩薩來迎圖は八月、十月の二期以外は絶對に展觀されぬこの事であつたから、一行は此日再び靈寶館を訪づれ、その模本の展觀を請うて滿足するの外なかつた。赤不動を見た直後とて、模本の筆端に力の拔けたところが目につ

くのは是非ないことであつた。龍光院では所藏の古文書を見る筈であつたが是日院主の不在の爲、殿堂の一覽に止め、最後に南院に波切不動を拜した後午後一時下山の途についた。京都驛に歸着したのは六時二十四分であつた。

此行全日程の半を雨に妨げられながらも一行はほゞ豫定の目的を遂行することを得た。滯在僅に三日にして、かくまで多くの古文書を讀破し古美術を鑑賞することの出來たのは偏に金剛峯寺及び各院の好意によるものであるが、別して連日一行の爲に東道の勞をさられまた調査上種々の便宜を圖られた久保氏に對しては中心より感謝の意を表したい。終に臨んで一行の歸學後、同氏から寄せられた律詩一篇を錄して記念とする。〔柴田〕

史訪不容存逸遺、名山卷發鐵幽披、春光恰待才賢好、
雨色深籠淵壑疑、禽鳥水泉聲樂妙、雲煙草木畫圖奇、
欲將勝事留佳話、拈筆聯題記實詩。

●京都帝國大學文學部史學科

本學年講義題目

	毎週		
國史概說（第一部）	二	三浦	教授
港灣の發達（前學年の續）	二		
封建制度の成立と其崩壞（演習）	一		
國史史料解題及講讀	一		
國史概說（第二部）	二	西田	教授
日本近世史の特殊問題	一		
日本近世文化の研究（演習）	一		
史學研究法（史學概論）	二		
現代の史學（第一學期）	一		
Gooch, History and Historians in the 19th Century.			
Steinberg, Geschichtswissenschaft der Gegenwart in Selbstdarstellungen.			
朝鮮史（古代及中世、第二學期）		今西	教授
朝鮮史籍解題及講讀（第二學期）			

日本古代史の特殊問題(第一學期)　三　喜田　講師
日本歴史地理(第一學期)　二
明治維新史(第二學期)　藤井　講師
古文書學(各説)　二　中村直講師
東洋史概説(古代及中世)　二
唐律を中心とする支那の法律　二　桑原　教授
支那の目錄學　二
支那古代史料の研究(演習)　二　内藤　教授
東洋史概説(近世)　二
支那最近世史　二
東洋史講讀　二　矢野　教授
蒙古史　二
中央亞細亞に於ける學術上の發見　二　羽田　教授
東洋史演習　二
西洋史概説(古代)　二
獨逸史學史(十九世紀中葉以後)　二
Ranke, Die gossen Mächte.

Lambeck, Quellensammlung f. d. geschichtlichen Unterricht an höheren Schulen. II. Reihe, Heft 61—70. (演習)　二　坂口　教授
Riess, Der Gang der neuzeitlichen Kulturentwickelung im Rahmen der Weltgeschichte. (講讀)　二
西洋史概説(近世)　二
グルマン民族と羅馬帝國との關係　二　植村助教授
Tacitus, Germania. (演習)　二
最近世史(一八七八以後、第二學期)　中村善講師
羅馬考古學(彫刻及繪畫等)　二
考古學概説　二　濱田　教授
日本考古學　二
考古學演習　二
人文地理學概説　二
最近の國境問題　二　石橋　教授
各國地誌演習　二

自然地理學概說　二　小川　教授
地質學總論（理學部講義自四月、至十月）　三
地史學（理學部講義自十一月、至三月）　三　中村新教授
地圖學及實習　二　小野　講師
舊石器時代の人類と其住地　二　小牧　講師
地理學講讀及實習　二
日本建築史（前學年の續、第一學期）　二　天沼　教授
日本美術史　二　澤村助教授
礦物地質學一般（理學部講義）　三　石川　講師

◉大正十五年度卒業論文題目

京都帝國大學文學部に於ける史學科本年度の卒業論文左の如し。（△印選科生）

史　學　科

○國史專攻

室町幕府之政治　後藤基次
復興期に於ける本願寺の教俗
二方面の狀勢について　△岡本隆男
士　族　△伊藤八郎

○東洋史專攻

北魏田制考　河村久三郎
支那古代に於ける奴婢に就いて　白石捷一
中唐に於ける寺院僧侶に就て　△塚本善隆

○西洋史專攻

ハンザ同盟に就て　木戸堅次
コンスタンチン大帝と基督教教會　鈴木祐吉
西米戰爭とモンロー主義　△村上　男

○地理學專攻

淡路の地理的考察　宮脇信雄
京都市域の變遷と其の地理學的考察　△塚本常雄

◉帝國學士院授賞式

帝國學士院にては去五月十六日東京美術學校講堂に於て授賞式を行ひたるが其の中史學地理學に關する受賞者左の如し。

恩賜賞
日本紋章學　沼田頼輔君

中國地方の古生層並ニ中生層の層位學上の研究　理學博士　小澤　儀明君

學士院賞

メシア思想を中心としたるイスラエル宗教文化史　文學博士　石橋　智信君

宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚の事蹟　文學博士　桑原　隲藏君

◉京都帝國大學第十七回夏期講演會

京都帝國大學は學術普及の爲例年の通來八月二日より夏期講演會を開催して一般有志の聽講を許すといふ講演科目中、史學地理學に關係あるもの左の如し。(詳細は京都帝國大學本部に照合すべしと)

中世の日本文明　文學部教授文學博士　三浦　周行君

恒星界の天文學　理學部教授理學博士　山本　一清君

日本財政史　經濟學部教授經濟學博士　本庄榮治郎君

原始的土地共有制度の研究　農學部教授經濟學士　黑正　巖君

科外講演

時計の話(幻燈使用)　理學部助教授理學士　上田　穰君

六朝の名家顧愷之の繪畫(幻燈使用)　文學部助教授文學士　澤村專太郎君

◉史學研究會

例會　去る三月二十日午後一時より學生集會場樓上に於て開催、左の講演ありて午後五時閉會せり。

應舉の眼鏡畫　文學博士　黑田　源次君

應舉の一派を立てしは寫生畫に始まりしが、それは覗き畫より影響を受けしものゝ如し。覗き畫は西洋より支那に傳はり、それより我國に傳來せしが、應舉は三十代より四十代頃までは此の眼鏡畫を主として畫けり、南蠻人の渡來せし頃より浮畫が我國に傳はり、元文四年頃にそれが大に流行せしが、應舉が此の浮畫より影響を受けしか或は支那の覗き畫より影響を受けしかは疑問なり、併し彼の眼鏡畫のテクニックは浮畫のそれと少しく相違せり、彼の版畫の現存せるものは寶暦九年頃より明和の初年頃に及び、當時の風俗をよく描寫せる點より風俗史

の研究上大に參考となるものなり云々。

支那崇山少林寺石塔群　　文學士　澤村專太郎君

支那崇山少林寺は北魏時代の草創にして武術の一淵叢たると共に古來の避暑地たり、寺西約一支里の丘上に石塔群あり。形式上より四角塔、六角塔、壺形塔に分ち得べし。四角塔は三重のもの多く年代は唐元の間に亙り貞觀七年の銘を有するあり。六角塔は元代の作多く五重を普通とす。壺形塔は喇嘛教に基き總て元以後なり。この外經筒形なるもあり。年代の古きものは胴短く安定を覺ゆ、後世のそれは變化に富み運動感覺を刺戟するもの多し。かく多數の塔が設立されたるは蓋し當寺が禪を主とする爲ならん。何となればこの宗派に於ては嘗しく人を重んじ賢人に於て法を觀る故に師家を敬しその死後を厚く營むを以てなり云々。

尙ほ當日は多數の眼鏡畫及び少林寺石塔群の寫眞拓本等を陳列して供覽した。

◉讀　史　會

例會　三月十六日午後六時半、樂友會館第五號室にて開催、三浦教授、牧、黑正助教授等十九名出席、左記の講演あり。終て三浦教授より本年度國史專攻卒業生の提出論文に就いての批判あり、十時半散會す。

南北朝時代に於ける高野山の去就に就いて　　文學士　魚澄惣五郎君

寺社はその性質より政治上の紛爭に對しては中立を守るべきものなるも、そが經濟上時としては軍事上の一勢力たる理由を以て種々の誘惑を受け易し。この點より南北兩朝に對する高野山の態度を觀察するに終始南朝に好意を寄せしも大體としては中立を守り、そのいづれをも積極的には援助することなかりき。この間兩朝共に種々の方法を以て之を懷柔せんと努力せしも遂にその態度を明かにせず。例へば貞和四年三月南帝賀名生に在はすや衆徒等五百十七人の連署を以て中立を宣言せるが如きこれなり。かくてこの一大勢力をその指揮下に置く能はざりしは南方に據れる吉野朝の最も不便とせし所ならん云々。

室町幕府の政治　　法學士　文學士　後藤　基次君

先づ武家政府の設立と共に我國の分裂に陷らざりしは君臣の關係の緊密なりし爲めなりと說き起し、室町幕府の政治の實體は鎌倉幕府の精神形態を傳へしものにして華を去つて實に就くといふ武家政治の精神に合せる點よりいへば大體よき制度なりしといふべし。しかしながら實際政策よりいへば環境の支配をうけて頻る問題の解決を困難ならしめりといひ、義滿義教等の行蹟を批判し、結局室町幕府の組織努力は非難すべきものにはあらざりしもその人を得ざりし爲に失敗に歸したものでありと斷じ、更に轉じて奈良朝以前のわが國民生活から生ぜし精神と隋唐文化輸入以來發生せる精神との對立を說いて前者は地方に殘り後者は京都に傳はれりとなし、この二個の精神が室町時代京都に於て接觸したりしことが本來地方に根據を有せし武家生活の墮落を來したものにはあらざりしかと結ばる。

例會　五月七日午後六時半、樂友會館第五號室に於て開會、三浦、西田兩教授等二十四名參集、左記の講演あり、十一時散會せり。

良源と蓮如　　收野信之助君

中世の佛教史上其の各の時代に於ける位置を比較し、前者は平安末期の僧兵の起原をなし、後者は戰國時の一向一揆と深き關係を有することを述べ、兩者とも各時代を背景となし、宗教家として動搖せる社會に臨みまた宗派內にあつては良源は反對黨を驅逐し一山を我派に歸せしめ、蓮如は本願寺をして他宗他派の上に出でしめて親鸞教を大成し斯くて兩者とも中興の師たるの大業をなしたり云々。

最近の研究から　　文學博士　三浦　周行君

一、江戸時代に於ける田畠永代賣買禁止法の起源沿革につきて先きに發表せられし研究の後を承けて專ら山林の所有權に關する概念と其立法とを、國有、共有、私有に分つて述べられたる後、維新後の政府及び各藩が多く民有に改めたるは非常の大改革に際し士族授產等の特殊の目的を以て特例を設けたるものにて必ずしも古來林政の精神にあらずと說かる。

二、應永の外寇に關し其後世に出でたる史料を以て先年の研究を補はれ特に當時明使の齎らせる國書と稱する

ものゝ逸早く世上に流布せるは、同時に世に行はれたる探題持範の書狀と稱する假記の文書と共に時好に投ぜんとする一種の際物的讀物たるべきことを指摘せられ、これを以て後世新聞の始祖と看做すも亦可なるべしと說かる。

例會　五月二十八日午後六時半、樂友會館第五號室にて開催。三浦教授、中村講師等二十一名出席。左記の講演あり。終つて德重、井川兩君の感想談ありて後今回史學科學生の研究旅行に赴くべき高野山の繪畫彫刻に就きての源君の所見を聽取し九時半散會せり。

永原氏に就いて　　橋川　正君

永原氏が應永の始頃より德川初期にかけて近江野洲郡一圓を領せし相當の家柄なりしことより其居城のありし同郡祇王村大字永原なる同氏遺族の傳へたる永原氏由緒と、別に他家に傳はれる永原氏系圖とを比較研究せば略その眞を把みうべきことを說き、永原氏の祖は佐々木氏の分流なるべきも史上に現はれしは宗行にして、この時始めて永原氏を稱し、義滿より近江國野洲を賜はれり。

其後を繼げる家長は佐々木正賴の三男なり、蔭涼軒日錄に馬淵の被官として見えたる永原氏は重行の代なり。次に重秀なるもの文明十二年以後領內各所に砦を構へ子重賴の代には合戰間斷なかりし事東本願寺天文日記等に反映す。この頃伊勢神宮に造替料七百貫文を寄進せるは永原氏の歷史に於て特筆すべき一事なるべし。重賴の後重賢は佐々木氏の部將として永祿中京都白河の戰に戰死せるが重冬に至つて佐々木氏と相反目す。信長の佐々木氏を征せしときその鋒を免がれしは之に內通せるに依るか後信長より七百石の加封を受く。信長の後は豊臣氏に從ひその一族福外氏は秀吉より神崎郡を賜はり、關原役に西軍に加つて滅び、永原氏は大阪落城後福外氏を稱せしが寛永以後庶民に歸せり。その城跡はほゞ實地に跡づくることを得云々。

◎西洋史讀書會

例會　去る五月六日午後六時より樂友會館に於て十五年度第一回の讀書會を開く。新しく十一名の第二回生諸君を迎へて樂しく晩餐を共にし、終つて左の紹介があつ

た。出席者二十名。

The Making of Bulgaria　佐藤寅佐武朗君

雜誌 History 所載の William A. Gauld 氏の論文の紹介である。

ブルガリアに關して十八世紀末までは何等の歴史記事がない。然るに十九世紀に入り、バルカンの國民運動旺となり、英佛獨列國の土耳古に對する壓迫も段々强くなつたので土耳古政府は遂にブルガリア人の教會を認むるに至つた。卽ち一八七〇年の勅令によつてブルガリアの監督の管轄區域は公に設定された。後一八七六年に開催されたコンスタンチノーブル會議に於て、ブルガリヤ國境協定問題が議せられることになつたが、英露兩國並に土耳古は各々自說を主張して讓らず遂に決定を見ずして會は終り、次で露土戰役となつた。

戰役終結後ブルガリアの國境問題は、アドリアノープル條約、サンステファノ條約等によつて、露土間にしば〳〵協定が試みられ、結局獨逸の斡旋により伯林會議に於てその決定を見るに至つた。その後一八八五年ブルガリア州と東ルメリア州との併合を見るに至り、こゝにブルガリアの境界は完全に決定されて一國家を形成するに至つた云々。

例會　五月二十一日午後六時より樂友會館に於て第二回例會を開き左の紹介をなす。出席者二十一名。

太平洋に關する日米の抗爭　森　瑞樹君

ミシガン大學教授アダムス著『合衆國外交史』の中の第十五章「太平洋に關する日米の抗爭」の紹介でペルリの浦賀來訪以來今日迄の日米兩國關係の概觀である。先づ日本の革新、日本の解放を緒言的に述べて日露のポーツマス講和條約締結に及び、これ迄は日米間には好感情流れ居たりしもこれを轉機として惡感情流れ始めたりとて日本人の移民問題を論じ、最後に太平洋に關する通商問題に論及し支那における日米の利害關係についての抗爭を說きて終つて居る云々。

クリートの古代文明に就いて　吉原　好人君

希臘人が希臘本土に現はれない時代クリート島に榮えたミノア文明に就いて述ぶ。Zeus ヲ Minos Theseus ヲ Minotaur Labyrinth ヲ Daedalus 等の傳說から都 Knossos その宮殿の壯觀、眞に迫る壁繪、島人の發明した螺旋

模模、彩色した陶器、次いで食物宗教文字から一般風俗嫪樂等に及び、最後に Knossos 等は或る蠻族の掠奪と放火とに逢ひ全く廢墟となり千九百年 Sir Arthur Evans の發掘に至るまで三千年古の榮華を包んで居たことで結ぶ。

◉考古學談話會

例會　五月五日午後七時から京都帝國大學學生集會場にて開催左の談話があつた。

木内石亭と其の書翰　　島田　貞彦君

「雲根志」の著者、木内石亭は維新及び明治以前に於ける我國の所謂十二考古家の一人として知られてゐるが石亭は特に先史考古學に對する見解の深刻なるものあり、石亭の平常に現はれた斯學方面は其の書翰によつて遺憾なく發輝せられたものがあつて、興味ある論究や石器蒐集の事實は斯學發達史を飾るべきものが多い。

一、パレスタインに於ける舊石器時代　小牧　實繁君

一九二五年六月イエルサレム英國考古學院ターヴィルピーター氏はガリレー湖畔タブガに於いてムステリアン期遺物と伴存するネアンデルタール頭蓋骨を發見せるが該人骨は多少近代人の性質を帶びたり、之れが歐羅巴以外に於いて發見せられたるは歐洲近代人の起原を考ふる上に重要なる事實なり。

支那發見の彩色土器　　濱田　耕作君

近時支那發見の該土器研究は益々其の高潮を來し、多大の注視を以てされてゐるが、博士は此等土器發見の各所と遺物を例示し、最後に興味ある其の文化的移動論を試みる所があつた。

以上三氏の談話に其の端緒を發し興味ある談話が更らに足立、喜田兩博士、横地石太郎氏等によつて湧出され來會者に多大の感激を與へるものがあつた。

◉古文書時代鑑下輯の發行

今回東京帝國大學史料編纂掛の發行に係る古文書時代鑑の下輯は安土桃山時代から幕末に至るまでの各方面の代表的筆蹟百二十枚を收めて居る。中にも豊臣秀吉が朝鮮京城の陷落の報に接して入明の部署を定めた時、毛利輝元に與へた檄文や大阪冬役の後夏役の前に眞田幸村が

大阪城中から姉婿小山田壹岐守父子に送つた自筆の書狀に討死の覺悟を示して居るもの其他足利義昭と織田信長との誓約書本能寺變直後に於ける明智光秀の細川幽齋に與へた覺書田邊籠城の際の古今傳授に關する幽齋の自筆狀大阪陣前鐘銘問題について辯疏のため駿府に下向の途中からこの問題について弟貞隆に與へた片桐且元の自筆狀さては春日局自筆の辭世の和歌山鹿素行の赤穗流謫の際に於ける日記或はまた賴山陽自筆の日本外史の奧書瀧澤馬琴自筆の八犬傳の草稿更にまた坂本龍馬小松帶刀西鄕隆盛木戸孝允等が擧兵討幕の盟約を締結した時に孝允が筆記したこの盟約の條項に加筆した龍馬の裏書など取り〳〵に興趣の盡きぬものがあつて何れも精巧なコロタイプ四ッ切版縱一尺三寸橫一尺の手漉きの局紙を用ひてあるから一本を座右に備へて置けばこれを基準として古文書古筆蹟の鑑定をすること出來よう、なほ初版は既に賣切れたので目下再版發行の準備中の由である。（代價各輯金二十圓）

會報

◉編纂餘言

本號は論文原稿輻湊の爲め、紹介欄全部を次號に讓ることゝせり。

◉寄贈交換圖書

綜合日本史概說上卷（栗田元次著）　栗田元次氏
明治維新史講話（藤井甚太郎著）　雄山閣
商業と經濟　第六年第二册　長崎高等商業學校研究館
伏見民政誌　伏見町役場
新井白石關係文獻總覽　日比谷圖書館
史學　五の一、二　三田史學會
民族　一の三、四　民族發行所
歷史地理　四七の三、四、五　日本學術普及會
朝鮮史學　二、三、五、六　朝鮮史學同攷會
史學雜誌　三七の二、三、四、五　史學會
經濟論叢　二二の三、四、五　京都帝國大學經濟學會

國學院雜誌　三三の三、四、五、六　國學院大學
伊豫史談　四二、四三、四四　伊豫史談會
考古學雜誌　一六の四、五、六　考古學會
人類學雜誌　四一の四　東京人類學會
龍谷大學論叢　二六七、二六八　龍谷大學論叢社
史蹟名勝天然紀念物　一の四　史蹟名勝天然紀念物保存協會
中央史壇　十二の三、十二の四、十二の五、十二の六　國史講習會

會員動靜

入會

大阪府北河內郡山田村大字中宮　長谷川安雄氏
大阪市東淀川區西大道町九八二　不可三新英氏
岐阜縣揖斐郡揖斐町　太宰不二丸氏
滋賀縣野洲郡速野村字洲本　內田顯英氏
岐阜縣安八郡神戶町　盛田清徹氏
德島市船場町　黑上正一郎氏
（右紹介者　那波利貞氏）

東京市外大崎町、立正大學史學科　藤敏夫氏
（右紹介者　澤田瑞氏）
東京府豐多摩郡野方町新井四五六　田中善一氏
（右紹介者　大館宗憲氏）
東京市外代々木初臺六〇七、藤川方　田山信郎氏
（右紹介者　大久保利謙氏）
東京市外中新井、武藏高等學校　今永馮次氏
大垣市、大垣中學校　藤田榮二郎氏
大阪市東成區、生野高等女學校　伊藤堯超氏
德島市、縣立師範學校　田中懋德氏
（右紹介者　栗田元次氏）
神戶市元町五町目三五　船井長治氏
（右紹介者　天沼俊一氏）
東京府下池袋、立敎大學寄宿舍東寮　楊能漸氏
（右紹介者　小林秀雄氏）
兵庫縣明石中學校　千鳥祐倫氏
（右紹介者　白石捷一氏）
京都市上京區小山下總町四八　ボンソンビ・リチヤド氏
（右紹介者　西田直二郎氏）

三重縣桑名郡長嶋村字又木　佐々木芳雄氏
大阪市浪速區元町一丁目七四五　宮本正一氏
京都市上京區河原町、京都ホテル内　淡川康一氏
京都帝國大學文學部史學科　三須桂十氏
同　藤井謙三氏
同　小薬田淳氏
同　村中八郎氏
同　高橋文雄氏
同　鍛田嘉一郎氏
同　秋貞實造氏
同　岩根智照氏
同　近間利輔氏
同　吉原好人氏
同　吉村彌太郎氏
同　古澤三郎氏
同　寺尾宏二氏
同　河合正武氏
同　鈴木成高氏
京都市上京區岡崎法勝寺町八四　長廣敏雄氏

（右紹介者　島田貞彦氏）
東京府豐多摩郡松並町字天沼四六八　定金右源二氏
（右紹介者　清水泰次氏）
三重縣安濃郡新町古河　加藤竹男氏
（右紹介者　中村直勝氏）

■退　會

高橋慶太郎氏

■逝　去

伊達彌助氏
小津龍之助氏
穗積陳重氏

右謹みて哀悼の意を表す。